追憶のパリとマドリード
――時を超えて変容する「ヘミングウェイ」と所縁の地

フェアバンクス香織*

［要旨］アーネスト・ヘミングウェイにとってパリは、1920年代に作家の修業時代を過ごした思い入れの強い場所である。またマドリードも「激烈な死」を求めたヘミングウェイが闘牛観戦をするべく、亡くなる直前まで足を運び続けた大切な場所であった。いずれの都市にもヘミングウェイと所縁のある美術館やレストラン、カフェが点在し、その一部は今でも残っている。本稿では、この二都市を中心にヘミングウェイの人生と作品に所縁のある場所を取り上げ、それらが彼の作品でどのように描かれているか、また時を経て「ヘミングウェイ」がどう受容されてきたかなどを確認する。

1. はじめに

2019年4月、パリのノートルダム大聖堂で火災が発生した。当時、修復作業中だった尖塔は焼けて崩壊し、屋根も三分の二が焼失するなど甚大な被害をもたらした。パリを代表する歴史的建造物として知られ、ユネスコの世界遺産にも指定されている大聖堂の周りには多くの人が集い、聖歌「アヴェ・マリア」を歌いながら祈りを捧げる姿がテレビに映し出された。また各国の報道ではパリに所縁のある著名人が数多く名を連ね、長い時を経てパリの社会・文化・芸術を彩ってきた彼らに、変わらぬ姿で寄り添い続けた大聖堂の存在感が改めてクローズアップされた[1)]。

この火災の惨事を受けて、フランスでは自国を代表する作家の一人ヴィクトル・ユーゴー（Victor Hugo）の小説『ノートルダム・ド・パリ』（*Notre-Dame de Paris*, 1831）がベストセラーに返り咲いたという[2)]。同じような現象は2015年11月にパリ同時多発テロ事件が起きたときにも見られ、アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1899-1961）のパリ回想録『移動祝祭日』（*A Moveable Feast*, 1964）のリバイバルが起きた[3)]。「もし幸運にもあなたが若い頃にパリに住んだことがあるならば、残りの人生をどこで過ごそうと、パリはあなたについてまわる。なぜならパリは移動祝祭日だからだ」という作中の文が引用された記事には、事件を経ても揺らぐことのないパリの魅力を再認識し、それを抱き続けたいと願うフランス人の切なる想いが滲み出ている。

時代が変われば、社会や人も変わる。小説や映画といった芸術のもつ「強さ」は、時を経て

＊准教授／アメリカ文学

も揺るがない価値を保持しながら、そのときどきの時代や人の変化に応じて異なる色合いを放つ柔軟性、異なる解釈を可能にするしなやかさを備えている点にある。もちろん、芸術家自身が特定のものや場所に対して抱く価値観も時を経て変わっていくだろう。先に挙げたヘミングウェイもパリとマドリードをこよなく愛し、幾度となく足を運んだものの、その捉え方や描き方は執筆時期や作品スタイルによって異なっていた。若き日のパリ／マドリードと晩年のパリ／マドリード、実際に体験したパリ／マドリードと想起するパリ／マドリード、など――。

2018年、拙稿「追憶のパリ――死後出版作品群における『1920年代パリ』の記憶とその機能」において、晩年のヘミングウェイが1920年代におけるパリの記憶をさまざまな作品にしたためた理由を探った。『移動祝祭日』の舞台となっている「1920年代パリ」がヘミングウェイの人生において極めて重要な位置を占めていることは周知の事実である。しかしそこから40年余りが経過した後、つまり晩年のヘミングウェイにとって「パリ」とはいかなる存在だったのかを検証しようとした試みは、新たに別の気づき――パリの記憶のもつ多面性とヘミングウェイの記憶の操作性――をもたらしてくれた。実際、改めてパリに足を運んでみると「1920年代パリ」は「ヘミングウェイのパリ」のほんの一部に過ぎず、今なお「パリのヘミングウェイ」が多くの場所で、21世紀の風に揺られながら息づいていることに気づかされた。そしてその気づきは、マドリードでもほぼ同じであった。

そこで本稿では、パリとマドリードを中心に、ヘミングウェイの人生と作品に所縁のある場所を取り上げ、それらが異なる作品でどのように描かれているかを確認する。本稿での総括を経て、ゆくゆくはヘミングウェイにとって（1920年代に限定しない）パリの記憶がいかなるものであったかについて再考し、さらに最晩年まで執筆を続けたスペインの闘牛ルポ『危険な夏』（*The Dangerous Summer*, 1985）におけるヘミングウェイのマドリード観や「追憶のマドリード」を見いだす契機としたい。

2. 追憶のパリ

2.1 ホテル・リッツ・パリ

ホテル・リッツ・パリ（Hôtel Ritz Paris）はヘミングウェイが生まれた1899年に創業、パリの中心部である1区に位置する高級ホテルである。『パリのアメリカ人』（*Becoming Americans in Paris*, 2013）を著したブルック・L・ブロワー（Brooke L. Blower）によると、1920年代当時、パリの右岸にあるホテルは“パリのアメリカ人”にとって重要な社交の場となっており、ホテル・リッツはその代表格だったという（23）。英語を話せるコンシェルジュの常駐やエレベーター、ニューヨークへの電報サービスなどを提供した右岸の高級ホテルには、ハリウッド映画のスターらに人気で、数ヶ月通しでスイートルームに宿泊する常連客もいたと言われている（Blower 23）。

1921年にパリに移住した頃の若きヘミングウェイにとって、右岸、とりわけホテル・リッツ・パリはまったく縁のない場所であった。当ホテルの名前がヘミングウェイの伝記に頻出し始めるのは約20年後の1940年代、彼が有名作家になり「パパ」と呼ばれるようになってからである。

四人目かつ最後の妻メアリー・ウェルシュ・ヘミングウェイ（Mary Welsh Hemingway）にプロポーズし（Mary 126）、彼女と86番の部屋によく泊まったという話は有名である。また当ホテルは第二次世界大戦中、占領ドイツ軍に接収され、ドイツ空軍のパリ支部として使用されていた。『コリアーズ』誌の特派員として第二次世界大戦に「参戦」したヘミングウェイは1944年にパリ奪還に立ち会い、従軍記者の枠を超えてホテル・リッツ・パリとシェイクスピア書店を「解放」した。その際、ホテルのバーで51杯のドライマティーニを飲み干したという武勇伝も残っている[4)]。

ヘミングウェイ研究、特に『移動祝祭日』研究においてもっともよく言及されるのが、1956年にホテル・リッツ・パリから、1928年以来ずっとホテルの地下室に眠っていたヘミングウェイのトランクが二つ出てきたというエピソードである。カーロス・ベイカー（Carlos Baker）によれば、中には小説のタイプ原稿や手書きのノート、新聞の切り抜き、本などがそのままの状態で入っていたという。ヘミングウェイは作家の修業時代を送ったパリ時代を懐かしみ「あの当時も今と同じくらい、ものを書くのが難しかった」（Baker 754）と漏らしたという[5)]。

後年のヘミングウェイの人生をさまざまな形で彩ったホテル・リッツ・パリだが、死後出版作品群での登場頻度は極めて低い。『移動祝祭日』では19章「サイズの問題」（“A Matter of Measurements”）でF・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）がリッツで知り合いに会う約束があると告げたときに言及されるのみである。一方、ホテル・リッツ・パリを解放したエピソードは「庭に面した部屋」（“A Room on The Garden Side”）という題目で小説化されている。当作品の時代設定は、パリ奪還直後の1944年8月。舞台はホテル・リッツ・パリである。語り手の「私」はアメリカ人作家でありながら、今は小規模のフランス不正規軍を指揮している。名前はロバートで、周囲からは「パパ」の愛称で呼ばれている。フランス人パルチザンのオネシムとマルセル、同じくフランス人でレジスタンス兵のクロード、アメリカ人ドライバーの「レッド」・ペルキーらがロバートの指揮下にいる他、ホテルの経営者であるチャールズ・リッツ（Charles Ritz）や第二次世界大戦に大佐として参戦したフランス人作家アンドレ・マルロー（André Malraux）がそれぞれ実名で登場する。

ホテル・リッツ・パリは4年におよぶ大改装を経て2017年に再開業した。ヘミングウェイが生前築き上げた当ホテルとの結びつきは、バー・ヘミングウェイ（Bar Hemingway）へと形を変えて今でも息づいている。

2.2 ロダン美術館

ロダン美術館（Musée Rodin、1919年開館）はパリの7区にある美術館で、フランス人彫刻家オーギュスト・ロダン（Auguste Rodin）の作品や、彼が集めた美術品が収められている。ヘミングウェイとロダン美術館の繋がりは、死後出版作品の一つ『エデンの園』（*The Garden of Eden*, 1986）で色濃く打ち出されている。ヘミングウェイが『エデンの園』に取りかかったのは1946年初頭、メアリーとの結婚を控えている頃であった。1958年まで原稿の一部をリライ

トしながら執筆を続け、手書き原稿とタイプ原稿を合わせて1,500頁以上（計51章、約16万8,000語）を書き上げた未完の大作である。

『エデンの園』において衝撃的なのは、三週間前に結婚したばかりの若いカップルが、新婚旅行を満喫中に性の役割を交換したセックスを行う場面である。妻のキャサリンはある日、何の前触れもなく長かった髪を男の子のように刈り上げ、デイヴィッドの元へ戻ってくる。そして夫デイヴィッドに性役割の交換という実験的な試みをもちかける。キャサリンによれば、ロダン美術館で見た彫刻からヒントを得たという。作中では具体的な作品名は言及されないが、すでにマーク・スピルカ（Mark Spilka）をはじめ多くの研究者によって、それがロダンの代表作『地獄の門』（*La Porte de l'enfer*, 1880-1917）の右上に位置する「オウィディウスの変身物語」（"Ovid's Metamorphoses"）であることが指摘されている[6)]［写真１、２（本稿に掲載されている写真はすべて筆者撮影による）］。レズビアン同士の性行為の一瞬を捉え、その一瞬を彫刻の手法によって恒久化したこのブロンズ像はキャサリンに強い衝撃を与え、その直後から彼女は夫婦の「破壊」と再構築に励むようになったのである。

［写真１］ロダン『地獄の門』

［写真２］「オウィディウスの変身物語」

若き日のヘミングウェイが足繁く通ったガートルード・スタイン（Gertrude Stein）のアパート（27 rue de Fleurus）からも、後述するモンパルナスからもさほど遠くない場所に位置するロダン美術館。しかし1920年代のヘミングウェイはロダンよりも「近代絵画の父」と称されるポール・セザンヌ（Paul Cézanne）に強い関心を抱いており「風景をセザンヌのように書こうと試みています」（*SL* 122）とスタイン宛ての手紙に書くほどであった。着目すべきは、ロダンの『地獄の門』から着想を得て、後年に執筆した『エデンの園』において、作中に登場する主人公が1920年代のヘミングウェイを彷彿とさせる若手作家であるという点である。後年のヘミ

ングウェイが若き日の自身を投影させた主人公デイヴィッドを創りあげる過程において、なぜロダンの彫刻を、同性愛者の性行為をとらえた彫刻を持ち出したのか。ヘミングウェイが実際にこの彫刻を眼前にしたのは一体いつなのか――この問いが明らかになれば、ヘミングウェイ研究におけるジェンダー／セクシュアリティ論に新たな見解を付すことができるかもしれない。

2.3 クロズリー・デ・リラ

クロズリー・デ・リラ（Closerie des Lilas）はモンパルナスに位置する1847年創業の老舗カフェである。ヘミングウェイの二番目のアパートからほど近く、若きヘミングウェイが創作を行ったお気に入りの「書斎」であった。短編「大きな二つの心臓のある川」（“Big Two-Hearted River,” 1925）や初の長編小説『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*, 1926）の初校を書き終えた場所として知られ、晩年に書かれた『移動祝祭日』においてもクロズリー・デ・リラで過ごしたひとときは温かみをもって再現されている。

> The Closerie des Lilas was the nearest good café when we lived in the flat over the sawmill at 113 rue Notre-Dame-des-Champs, and it was one of the best café in Paris. It was warm inside in the winter and in the spring and fall it was very fine outside with the tables under the shade of the trees on the side where the statue of Marshal Ney was, and the square, regular tables under the big awnings along the boulevard.（81）

クロズリー・デ・リラはヘミングウェイにとって、アメリカの同時代作家との交流の場でもあった。フィッツジェラルドとはディンゴバーで初対面を果たした数日後にクロズリー・デ・リラで再会、すでに作家として名を馳せていた彼から作品の助言を得るなど、その後長く交友関係が続くこととなった。『U.S.A』三部作で知られるジョン・ドス・パソス（John Dos Passos）とも「ベルモットカシスのような無害な飲み物」を交わして文学談義に花を咲かせたという（Dos Passos 141-42）。

長い歴史を通じて多くの芸術家が足を運んだクロズリー・デ・リラには、今なお多くの足跡がさまざまな形で残されている。ヘミングウェイ関連では三つ。一つ目はヘミングウェイが好んで座ったというカウンター席にあるプレートである。そこにはヘミングウェイの名前が刻まれていて、希望すれば誰でもその席に腰掛けることができる［写真３］。二つ目は当カフェのメニューである。店の名前が書かれた右下には “Aux Closerie des Lilas / d’un client fidele 1920-1936 / Ernest Hemingway”（クロズリー・デ・リラ／忠実な客 1920-1936 ／アーネスト・ヘミングウェイ）と彼の直筆メッセージが掲載されている［写真４］。そして三つ目はテーブルの各席に敷かれる紙製のマットである。そこにはルクセンブルク大公夫妻（Henri et Maria Teresa de Luxembourg）からポルトガルのサッカー選手クリスティアーノ・ロナウド（Cristiano Ronaldo）、さらには北野武に至るまで世界中の著名人の直筆メッセージやイラストが寄せられている。注

目すべきは、アメリカ人俳優ポール・ソルヴィノ（Paul Sorvino）が記した “This is a great place ―not moveable―but great” である。このメッセージが、クロズリー・デ・リラが幾度となく登場するヘミングウェイの『移動祝祭日』（*A Moveable Feast*）を想起させるものであることは指摘するまでもないだろう。当カフェにおける「パリのヘミングウェイ」は現在、時空を超えた著名人と共存しながら、1920年代当時とは異なる趣を醸しだしている。

［写真３］ヘミングウェイの「指定席」と名前が刻まれたプレート

［写真４］クロズリー・デ・リラのメニューの一部

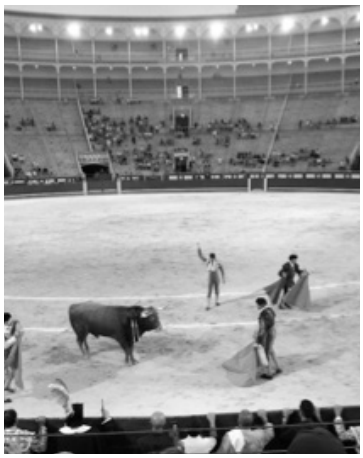
3. 追憶のマドリード

ヘミングウェイとスペインというと、闘牛観戦やパンプローナでの牛追い祭り、そしてスペイン内戦への強い関わりがすぐに浮かぶだろう。激烈な生と死を眼前にできる場所として、ヘミングウェイは亡くなる前年まで足を運び続けた。マドリードに関しては、国内各地から多様な人たちが集っていることを受けて「もっともスペインらしい場所」と表現、マドリードを舞台にした短編に「世界の首都」（“The Capital of the World”）と名づけるほどであった。

3.1 闘牛場

ヘミングウェイと闘牛の結びつきは強い。ガートルード・スタインの勧めもあって1923年に初めてスペインで闘牛観戦をしたヘミングウェイは瞬く間に闘牛の虜になった。その後生涯にわたってスペイン各地の闘牛に興じることになったヘミングウェイは、闘牛士らとの親交を深めながらその世界に精通していった。

闘牛にまつわる作品としてすぐに思い浮かぶのは、闘牛について綴ったノンフィクション『午後の死』（*Death in the Afternoon*, 1932）と、晩年にしたためた闘牛ルポ『危険な夏』である。マドリードとの関連性を加味すると「闘牛について学びたいなら、あるいは闘牛に強い興味をもったなら、遅かれ早かれマドリードを訪れなければならないだろう」（*Death in the Afternoon,* 37）の一節で知られる『午後の死』が有名である。ここで言及されているマドリードの闘牛場とは、スペイン最大級を誇るラス・ベンタス闘牛場（Plaza de Toros de Las Ventas）を指している。スペイン独特の建築様式、ネオムデハル様式で建てられたラス・ベンタス闘牛場は赤いレンガ造りの円形の建物で、観客席が計10のセクションに分かれている。ヘミングウェイが特に好んだのは直射日光の当たらない第9セクションで、そこからは闘牛の一連の流れをほぼ真正面から楽しむことができる。



［写真５］第９セクションからの闘牛観戦

また闘牛場には、歴代の著名なマタドールの顔やプロフィールなどが描かれたタイルが円形の建物に貼られている。『危険な夏』に登場する二人の闘牛士、アントニオ・オルドネス（Antonio Ordóñez, 1932-98）とルイス・ミゲル・ドミンギン（Luis Miguel Dominguín, 1926-96）のタイルもそれぞれ離れた場所に飾られている。オルドネスのタイルには「ロンダ生まれの闘牛士への賛辞／巨匠の中の巨匠／闘牛界の誇り」、そしてドミンギンのタイルには「彼の力と並外れた闘牛士を記念して」などと書かれている。『危険な夏』は闘牛ルポという（ノンフィクショナルな）形を取りながら、実はオルドネスに過度に肩入れするヘミングウェイによって「強くて勇敢なオルドネス vs. 弱くて臆病者なドミンギン」という当時の実際の評価とは異なるフィク

ションに仕立てられている。これは、最晩年のヘミングウェイが自身をより投影しやすいオルドネスを中心に据え、彼を美化することによって、それを逆映写させる形で自身を美化しようとしたのだと考えられる。

［写真６］オルドネスのタイル

［写真７］ドミンギンのタイル

ヘミングウェイとマドリードの関係性を捉え直すとき、彼の闘牛（士）観の考察を入れずには成立しないだろう。しかしそれは年代とともに確実に変容していった。晩年のヘミングウェイは自ら闘牛に足を運びながら、スペイン闘牛におけるかつての伝統が薄れ、派手なパフォーマンスを取り入れるようになった新たなトレンドに強い嫌悪感を顕わにした。そのトレンドは今でも変わっていないようで、マタドールが跪いて牛に相対する一幕があった。闘牛のもつ残虐的な側面がクローズアップされている昨今、観客数が激減しているため、分かりやすい形で観客にアピールすることがより重要視されているのかもしれない。しかし、ガッツポーズをしながら観客に拍手を請うマタドールの姿を見るにつけ、筆者が目にしている闘牛が、1920-30年代にヘミングウェイが目にしたものとは確実に異なることは明らかであった。その代わりに、1950年代の闘牛に失望したヘミングウェイの気持ちに少し触れた気がする体験であった。

3.2 Botín

ボティン（Botín）はマヨール広場の近くにあるマドリード料理のレストランである。1725年の創業で「世界最古のレストラン」としてギネスブックに登録されている。ボティンはヘミングウェイを筆頭に多くの作品の舞台になっており、ホームページには “Botín in Literature” と題して20名におよぶ作家の作品からの引用が掲載されている。ヘミングウェイに関しては、長編『日はまた昇る』の中で、主人公ジェイク・バーンズが「世界最高のレストランの一つ」（124）であるボティンで名物料理の子豚の丸焼きを食す場面がある。ヘミングウェイ自身にとってもボティンは大のお気に入りのレストランで、1923年に初来店して以来、マドリードを訪れるたびにボティンに寄ったとまで言われている。闘牛について綴ったノンフィクション『午後の死』でも、「しばらくの間は［闘牛士の］友人が事故に見舞われるかもしれないとくよくよ考えるより、ボティンで子豚の丸焼きを食べていたい」（202）と書くほどであった。

ボティンのオーナー、アントニオ・ゴンザレス（Antonio González）は、さまざまな時代のヘ

ミングウェイの様子をインタビューで語っている（Stanton 1-7）。まずは1920年代半ば。ヘミングウェイはよく開店前の正午に来店し、ワインとグラスを注文すると本と紙をテーブルに広げ、友人が昼食にやってくる午後2時頃まで執筆をしていたそうだ。またスペイン内戦前の1930年代前半には、アントニオの父で当時オーナーだったエミリオ（Emilio）にレストランでの一日の仕事を質問したエピソードが紹介されている。朝7時に起床してから最後の客が店を出る午前3時まで働きづめだと聞かされると、ヘミングウェイはエミリオに向かって「君はディケンズの時代の人みたいに働くんだね」（Stanton 3）と言ったという。そんな会話を楽しむ間柄であったヘミングウェイとボティンのオーナーであったが、1936年にスペイン内戦に突入すると、ボティンも一時閉店を余儀なくされてしまう。それでも北米新聞連盟（通称NANA）の報道記者として内戦中のスペインに四度も赴いたヘミングウェイは、ボティンにも立ち寄り、酒を片手にエミリオと語りながら「戦争が終わって数年経てば多くのアメリカ人がここにやってきて、また繁盛するようになるよ」（Stanton 5）と励ましたという。

ヘミングウェイがボティンをこよなく愛した理由は、アントニオも語っているように、ボティンが200年を超す長い歴史において、スペイン内戦の影響で6年間もの閉店を余儀なくされてなお、変わることなくいつ行っても同じ雰囲気で、美味しいワインと食事を堪能できることに居心地の良さを感じたからだろう。ヘミングウェイにとってスペインは、内戦や闘牛に代表されるように「激烈な生と死」を強く喚起させる場所であった。そんな中にあって穏やかにたたずむボティンはヘミングウェイにとって大きな癒やしであったに違いない。

以上、パリとスペインに焦点を当てて、ヘミングウェイ作品に所縁のある場所が彼の生前と死後、どのような形で息づいているのかをまとめた。過去の記憶は決して一枚岩ではなく、どの時点での過去を思い出すか、また思い出す時期によって異なるだろう。また現在もランドマークのように語られる「ヘミングウェイ所縁の場所」が必ずしもヘミングウェイ本人が体験したものと同じとは限らないことも確かである。上記のまとめをもとに死後出版作品を中心としたテクストの分析を進め、ヘミングウェイにとっての「追憶のパリ」および「追憶のマドリード」の様相を多層的に明らかにしていきたい。

［写真８］
ヘミングウェイが好んで座ったとされるテーブル。彼の名前はないが、現在もファンに開放している。

注

1）たとえばBBCの報道（4月20日付）“Notre-Dame fire: Eight centuries of turbulent history” では、1919年にシルヴィア・ビーチ（Sylvia Beach）がセーヌ川の左岸に開店した書店「シェイクスピア・アンド・カンパニー（Shakespeare and Company）」が取り上げられ、そこに足繁く通って「フランス文化を吸収した」アメリカ人作家エズラ・パウンド（Ezra Pound）やヘミングウェイ、イギリス人作家ジェイムズ・ジョイス（James Joyce）などが紹介されている。（https://www.bbc.com/news/world-europe-47971044, Last accessed on 16 Sep 2019.）

2）The Guardian, “Victor Hugo’s Notre Dame novel tops bestseller list after fire.” の2019年4月17日付の記事。（https://www.theguardian.com/world/2019/apr/17/the-hunchback-of-notre-dame-book-tops-bestseller-list-fire, Last accessed on 16 Sep 2019.）

3）The Guardian, “Hemingway’s Paris memoir rises to No 1 in France following terror attacks.” の2015年11月20日付の記事。（https://www.theguardian.com/books/2015/nov/20/hemingway-paris-memoir-no-1-france-following-terror-attacks-a-moveable-feast, Last accessed on 16 Sep 2019.）

4）“Bar Hemingway at Ritz Paris”（https://www.ritzparis.com/en-GB/fine-dining-paris/bar-hemingway, Last accessed on 16 Sep 2019.）

5）ヘミングウェイに関する伝記をいくつか紐解いてみると、ホテル・リッツ・パリで発見された原稿と『移動祝祭日』の関連性、つまり原稿発見が本当に当作品を書く契機になったのかや、原稿の内容をどれほど作品に援用したかについて統一された見解はないようである。ベーカーは『アーネスト・ヘミングウェイ』において、原稿発見が『移動祝祭日』を書く契機になったと述べているが、『アーネスト・ヘミングウェイの「移動祝祭日」――神話の構造』（*Ernest Hemingway’s* A Moveable Feast: *The Making of Myth*, 1991）を著したジャクリーヌ・タヴェルニール＝クルバン（Tavernier-Courbin, Jacqueline）は、そもそも「リッツ原稿」は存在しないと断定している（3-19）。ちなみに、同じくヘミングウェイの伝記研究者マイケル・S・レノルズ（Michael S. Reynolds）は『ヘミングウェイ：最後の歳月』（*Hemingway: the Final Years*, 1999）において、『移動祝祭日』の執筆経緯などには言及しているが、リッツホテルの原稿については触れていない。

6）Spilka, Mark. pp.285-86.

Works Cited

Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Scribner’s, 1969.

Blower, Brooke L. *Becoming Americans in Paris: Transatlantic Politics and Culture between the World Wars*. NewYork: Oxford UP, 2011.

Dos Passos, John. *The Best Times: An Informal Memoir*. New York: New American Library, 1966.

Hemingway, Ernest. *A Moveable Feast*. New York: Scribner’s, 1964.

-----. *Death in the Afternoon*. 1932. First Touchstone Edition. New York: A Touchstone Book, 1996.

-----. *Selected Letters: 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner’s, 1981.

Hemingway, Mary Welsh. *How It Was*. New York: Alfred A. Knopf, 1976.

Reynolds, Michael S. *Hemingway: the Final Years*. W. W. Norton, 1986.

Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1990.

Stanton, Edward F. *Hemingway and Spain: a pursuit*. Seattle: U of Washington P, 1989.

Tavernier-Courbin, Jacqueline. *Ernest Hemingway's* A Moveable Feast: *The Making of Myth*. Boston: Northeastern UP, 1991.

フェアバンクス香織「追憶のパリ――死後出版作品群における『1920 年代パリ』の記憶とその機能」『ヘミングウェイ研究』第19号（日本ヘミングウェイ協会、2018年）: 41-51頁

（2019.9.27 受稿 , 2019.10.29 受理）